

Criminal (MBE) - 赤字は過去問 -

<初めに>この MBE 知識集は、筆者が2回の California Bar 受験を通じて Kaplan (青本 600 問)、Barbri (2000 問)、Adaptibar (過去問 1350 問) を問題演習した結果、獲得したときの知識を整理したものです。Barbri の講義内容に沿ったノートに記載されている基本的知識、要件等は掲載していませんので、必ず、ノート読みを終了し、MBE 問題演習を開始後に活用して下さい。本試験直前の知識確認アイテムとしても有用です。

< Essential Elements of Crime >

- ・撃たれて unconscious の状態で、撃ち逃したら他人に当って死亡。→無罪 (先にケンカを始めた場合も同じ)
- ・借金の申込時に、貸主側が他人と勘違いして本来より多く貸付を許可した場合、返済不能と判っていても、事実を告げる duty はなく、misrepresentation は不成立。

☆通常は general intent crime であっても、制定法により specific intent crime とされている場合がある。
↳その場合の intent の内容は、条文どおり。

☆specific intent crime 以外では、当該行為を行う intent で足りる。

↳ex) 「未成年に」酒を飲ませる intent は不要。(cf. strict liability なら未成年の認識も不要)

※何れにしても、「general intent crime であること」は、加害者側にとって全く helpful でない。

※Attempt Arson は、specific intent である。→ “voluntary intoxication” が抗弁になる。

↳cf. Arson は、“burning” があり既遂になると、同抗弁は成り立たない。

☆全ての犯罪において (strict liability crime 含む)、“Attempt” は specific intent crime だから、intent なしが defense になる。(“conspiracy” と同じ)

< Crime Against Person >

Battery (暴行)、Assault (脅迫)

※刑訴 “intent” は TB (構成要件) だから、これを欠くことは立証責任を D に課すことは×。

・battery の intent で死亡の結果が生じると、「voluntary manslaughter」がありうる。

身体 of 傷害、攻撃的な接触がなくても (Attempt でも) Assault が成立する。

・物を投げつけた者が Assault の罪責を逃れるためには、①Not intend to hit anyone かつ②V did not see it の両方を満たす必要あり。

- ・ Assault は、その結果生じた attempted murder (殺人未遂) に吸収されない。→両罪が成立する。
- ・ 逃げようとして V の面前を走り抜けたため、V が転倒したとしても、intent (mens rea) がないから、Assault は不成立。
- ・ (Aggravated) Assault and Battery は、felony murder の要因とはならない。(暴行行為は1つだから)
- ・ (Aggravated) Assault and Battery は、Robbery に吸収されない。

Homicide (殺人)

※ガソリンスタンドでパイプを切断する行為は arson の intent ありで、2 階の人が居る場合は malice aforethought もある。→arson と murder が両方成立する。

※心臓が悪い患者の移植手術を延期させるために、毒を投与して、延期した間に心臓発作で死亡した場合、homicide が成立する。

※brain dead (脳死) で、all brain function が停止した段階で、死亡が宣告される。

↳事件から 1 年以内なら、homicide 成立。

Essay felony murder が成立しうる事案でも、必ず Common law murder も検討する。

- ・ 飲酒することは conscious risk-taking であり、malice aforethought の有無を判断する要素になりうる。
- ・ 毒を授与して殺そうとしたところ、致死量ではなかったが、V が医者を呼びに行く途中で、転倒して首を骨折して死亡。→murder 成立 (causation あり)
- ・ 妹が殺してしまったと信じて、確認せずに V を水中に投げ入れたところ、実は生きていて窒息死した場合、involuntary manslaughter のみ成立。(malice aforethought がない)

tip 問題文が “the third judge could properly give a charge to the jury on the following theories:~” となっていたら、成立する罪名でなく、可能性がある全ての類型を挙げる。(Jury が決めること)

↳murder、voluntary manslaughter、involuntary manslaughter

- ・ Attempt murder は、殺意があった場合、及び、Felony Murder のみ。

↳ex) 自動車を傷つける目的で、隣を走行中の自動車に接触したところ、崖から転落して重傷を負った場合は、specific intent がないから、Attempt murder は不成立。

ex) 唾を吐かれて怒って灰皿を投げて殺してしまった場合、“premeditate” が認められないから、成立し得る最も重い罪は 2nd degree murder である。

※殺意がなく、腕を狙って撃った結果、胸に命中して死亡した場合、murder である。(注) provoke なら、voluntary manslaughter になりうる)

※酒癖が悪いことを自覚しながらの飲酒行為は、reckless になりうる。

※ライオンのおりを開ける行為、playground の近くの林で hunting をする行為は、reckless である。

↳注 その結果死亡しなければ、殺人未遂罪は問われない。

※不作為の murder では、殺意がなかったことが best defense!! (malice aforethought を否定できるから)

※「承諾」殺であっても、当然に 2nd degree に落ちる訳ではない!! [1st の可能性あり] (減刑事由でない)

・1st degree murder” を免れる論理としては、voluntary manslaughter よりも、specific intent がいないこと (酩酊など) が強い。(言葉だけでは、provoke が認められにくい)

※misdemeanor に伴う死亡は、Involuntary manslaughter である。

☆Battery と Assault は Misdemeanor。

※Voluntary intoxication は、Felony の specific intent を阻却する場合は、Felony Murder の抗弁になる。

※Felony Murder において、Felony は未遂でも OK。

・felony murder では、共犯者が凶器を所持していることを知っていた必要なし。

↳ex) 共犯者に「武器を持たず burglary に行こう」と述べていた場合でも、felony murder が成立する。

・Burglary、Larceny の機会に、物音に驚いた住人が転倒して死亡した場合も、Felony Murder が成立する。

・robber が hostage に自分の服を着せて、police が撃った場合、↳unjustifiably high risk to human life であり、felony murder が成立する。

※felony murder と、burglary, robbery は同時に成立しうる。

☆Battery は致死の行為そのものだから、felony murder は不成立。[assault with a deadly weapon も同じ]

・薬物を飲ませて書類を奪ったところ、意に反して死亡した場合、felony (robbery) murder として、2nd degree murder が成立しうる。

※Toy gun で銀行強盗をしたら、客が発砲して第三者が死亡した場合、「危険を創出する intent が無かった」と主張しても無意味。(現に危険の外観を創出した以上、intent は無関係)

↳ “not responsible for the acts of the customer” と主張した方がマシ。

※robbery が終わって逃走中でも、felony murder が成立しうる。

↳ex) 警備員が撃って、第三者が死亡した場合は、felony murder 成立。

※Felony murder が廃止されていても、強盗の機会に共犯者の 1 人の行為により、死亡結果が生じた場合は、2 人とも murder である。

☆voluntary manslaughter は、①激情犯 (Provocation) の他に、②過剰防衛 (imperfect self-defense doctrine) もある!!

☆ “first degree murder” を否定する理由としては、「激情犯」より「ヘロインで記憶が無かったから specific intent が無い」という理由の方が best。(→Second に落とせる!!)

☆居合わせた第三者に対しては、激情犯 (Provocation) の抗弁は主張×。

- ・先に攻撃した場合、相手の正当防衛に対しては、激情犯 (Provocation) の主張×。
- ・激情犯 (Provocation) の “Reasonable Person” の検討は、被告人の属性も考慮する。

↳ex) ピアニストが指を折られた場合は、通常のピアニストが基準。

- ・激情犯 (Provocation) の抗弁は、Battery には無関係。(そもそも、無罪になる法理ではない)
- ・本物の gun であるべき所でなく、stage gun であると思って撃ったところ、他人が本物を置いておいたため、死亡結果が発生した場合、“negligence” は存在しないから、“involuntary manslaughter” は不成立。
- ・過剰防衛 (imperfect self-defense doctrine) を採用する state では “voluntary manslaughter” になる。

※子供を医者に診せずに死亡させて場合、malice aforethought はない。→ “involuntary manslaughter” が成立しうる。

“adequate provocation” があったことを被告人に立証させることは、憲法違反。(malice aforethought は検察官の立証責任)

↳cf. 正当防衛、insane とは異なる!!

☆Manslaughter は Common-Law では Specific Intent 不要だが、Statute で “consciously disregarding ~” と法定されている場合は、Specific Intent が必要。

↳intoxication の場合、原因において自由な行為行為が state の best argument。

- ・突然 epileptic seizures になる人は、自動車を運転すると “knowingly and recklessly” である。
- ・救助義務を果たさずに死亡した場合、Involuntary manslaughter。(殺意があれば、murder もありうる)

False Imprisonment、Kidnapping、Rape

※V が任意に D 宅に来て滞在している限り、False Imprisonment 不成立。

- ・Kidnapping は、False Imprisonment に移動を伴ったもの。

↳何か一つしか成立しない!! (Kidnapping が起訴されて False Imprisonment を認定することは OK)

※ドライバーを gun で脅して走行させると、kidnapping が成立する。

☆検察官は、被害者の同意が無かったことについても、beyond a reasonable doubt の立証要。

☆“attempted rape” は、specific intent crime である。but 既遂になると、specific intent crime でなくなる。

※法定年齢未満と思って性交しても、実際は年齢に達していた場合、Statutory Rape 不成立。

< Crime Against Property >

Theft (窃盗)

・窃盗目的で居住侵入すれば、(何も盗らなくても) Burglary の他に attempted larceny が成立する。

※他人の違法薬物を無断で捨てた場合も、larceny になる。

※ウソを述べて、占有を移転させた場合は、“larceny by Trick”

☆ “permanently” の要件があるから、使用窃盗は Theft にならない。

↳ex) 次に訪問した時に新品を補充するつもりで缶ビールを飲んでしまっても、友人に対する larceny は不成立。

↳ex2) robber が、近くの駅までの逃走用として第三者の自動車を無断で運転しても larceny 不成立。

・store a cashier がレジの金を盗ると、Larceny。

・truck の driver が積み荷の wine を盗ると Larceny。

※intention to deal with the property in a manner that involves a “substantial risk of loss” to the owner で、Larceny 成立。

※self help を認める州では、V が \$ 100 の損害賠償債務を負っていると信じて V 宅に侵入して \$ 100 取ってきても、Specific Intent を欠くから、Larceny は成立しない。

・自分の物を取り戻す(相手に占有権原なし) → Larceny 不成立。

・使用窃盗後の横領 → Larceny 成立。

・自分の物と勘違いしていた後に、気付いたが横領 → Larceny 不成立。(占有開始時に intent がなかった)

※一時的に借りるつもりでガレージに入り車を出庫し、その後気が変わって占有所得した場合、larceny のみ成立する。“burglary” は不成立。(ガレージに入った得意、felony intent なし)

※時計を盗もうとして、“pick up” すれば既遂である。

・占有離脱物については、D が所有者を特定しうる時は Larceny になる。

Embezzlement (横領)

☐注 (Larceny と異なり、) 物理的移動は不要。

・共謀者間の不法原因給付でも、Embezzlement になる。

ex) 犯罪の道具を買うために出資させたが、当該犯罪を止めて返金しなかった場合、embezzlement 成立。

※合法的に預かっている PC を第三者に売却すると、embezzlement 成立。(質屋が第三者に売却した場合)

営業職員は、移動に使っている車用者について解雇された直後も lawful possession あり。（×larceny）

☆おとり捜査では、被害者（役）に処分行為がないから、false pretense は不成立。

☆False Pretense は **specific intent crime** だから、権利があると unreasonably に信じていても免れる。

↳ D の内心（信じていたこと）が reasonable か否かは無関係。

↳ ex) 夫名義の年金を夫死亡後も受領できると信じて夫のサインをした場合、“should have know” だったとしても specific intent がないから、Embezzlement 不成立。

False Pretense（詐欺）

☆misleading があつたならば、支払の intent があつても、false pretense を免れない。

→ “material” fact にウソはないという抗弁は OK。

・残高不足を認識していたが、翌日に入金できると思って check を切った場合、false pretense 不成立。

↳ 翌日に入金する intent があれば OK。（入金の期待が unreasonable でも OK）

※（Larceny、Embezzlement と異なり、）V が A に処分行為を行い、title を取得する必要がある!!

↳ ex) 預かっていた車を 500 \$ で売ったが、250 \$ で売れたとウソをついて残りを取得したら、embezzlement。

↳ ex) 腕時計を試着する許可を得て店を出て、そのまま戻らなかった場合は、Larceny by trick。

・冗談であり、後で返すつもりだった場合は、false pretense 不成立。

・相手が信じてなく処分行為が無い場合は、false pretense 不成立。

※将来の fact について嘘を述べても、false pretense 不成立。

☆title 取得が必要だから、“temporary”（一時的に使用させる、貸す場合等）には false pretense 不成立。

・V の reliance が要件。→おとり捜査では、false pretense 不成立。

・本人の代わりに受領するとウソを述べて銀行（被害者）から金銭を受領した場合、金銭の占有を取得したが、title 移転は無いから、“larceny by Trick” である。

↳ 自らの名義で金銭を受領した場合は、金銭の title を取得しており、“False pretense” になる。

区別 “False Pretense “は、title を奪う場合。

“Larceny by trick “は、possession のみを奪う場合。（契約が無効である場合も含む）

Robbery（強盗）

☆Robbery=Larceny+Battery **or** Assault

☆死人に対する robbery は不成立。（Force なし）

↳cf. 死人に対する Larceny は成立する。（遺族の占有の侵害だから）

※Battery に相当する行為で、Force が認められうる。（反抗抑圧は不要）

・pistol で脅したところ、あわれみの気持ちで物を差し出した場合、robbery 不成立。（反抗抑圧は不要）

↳不能犯として、attempt robbery は成立しうる。

☆害悪の脅しは現在のものである必要あり。→将来の害悪告知は、extortion（恐喝）になる。

・強盗した後、逃走中に逮捕を逃れるためにピストルで足を撃つと、Robbery の他に aggravated battery が成立する。（この場合、Robbery は既に既遂になっており、吸収されない。）

Other Property Crime

※真の所有者が、盗難届けを出した上で、盗難車と偽って売却を申し出ても、これを購入した者に “receipt of stolen property” は成立しない。

・盗品譲受は、“intent” 不要。（know で足りる）

・Forgery は、書面の名義の偽造 only。→書面の内容を偽ることは、false pretense になる。

☆300 年前の手紙を偽造しても、Forgery 不成立。（Apparent Legal Significance がない）

< Crime Against Habitation >

Burglary（住居侵入）

※趣味の創作のために使用許可して合鍵を渡している場合、女性を連れ込んでも「breaking」にならない。

・少し開いているドアを開けても、breaking になる。

・敷地に入って、窓の外で放火用器具を投入しても、Breaking にならない。

※felony を達成する為であれば、道具の挿入だけで “entering” になる。

※一部が sleeping の目的であれば、建物全体が “dwelling” である。

・賃貸している物件は、“of another” である。

※留守中に家を見ておくことを頼まれた隣人がパーティーを開いても、burglary は不成立。

※Burglary が “entering a building unlawfully with the intent to commit a crime” と州法で定義されている場合は、絵画を盗む目的で open している美術館に入っても不成立。（unlawful でないから）

☆Burglaryに必要な **specific intent** は、felony の **specific intent**。(dwelling の認識が無くても成立)

☆侵入後に felony の intent を生じた場合は、burglary 不成立。

- ・ felony の実行が不可能と考えていた場合、“intent to commit felony inside” がなく、burglary 不成立。
- ・ 意図した行為が、実は felony でなかった場合、burglary 不成立。

Arson (放火)

用語の確認 「charred-黒焦げする。Arson 成立。」 「blistered-水ぶくれする。Arson 不成立。」

- ・ 壁や天井がはがれたら、burning あり。(blacken では×)

※Intentionally or recklessness。

※単に煙が出たり、水で損害を受けただけでは×。

- ・ カーテンが燃えただけでは×。→attempted arson が成立する。
- ・ 放火目的で床にガソリンを撒いた場合、(ライターを忘れてきたとしても、) attempt arson が成立する。
- ・ “back porch” (ベランダ) は、dwelling の一部。
- ・ Common Law では、dwelling のみ。→多数の州では、dwelling に限らない旨の修正がされている。
- ・ 火災保険をかけてあると、自分の家でも Arson になる。

<Accomplice Liability>

- ・ 友人に自分の物であるが、担保に取られている物を V 宅から取ってきてもらった場合、
↳友人が知らない場合は、通常の larceny。友人が知っている場合は、larceny の accomplice。

↳何れにしても、友人の認識にかかわらず、D は larceny 成立。

- ・ “accomplice to negligent homicide” は有り得ない。

※単に現場に居たとか、犯罪が起こることを知っていただけでは、accomplice にならない。

- ・ 友人が殺人をする可能性を認識しながら gun を貸しても、(Attempt) Murder 不成立。(intent がない)
↳「V に警告の電話をした」から不成立になるのではない!!
- ・ バットを通常の値段で売っても無罪。
- ・ セキュリティシステムを無効化する機械を通常の値段で売っても、Burglary の共犯になる。
- ・ 鉄パイプを 100 \$ で売ると、Burglary の共犯になる。

☆身分なき共犯 OK。

※法によって守られる者自身が他人に依頼した場合は、当該依頼人は、共犯・正犯にならない。

☆A→（殺人依頼（幫助））B→（Cの承諾を得て殺害行為）Cの場合、Bは承諾殺の抗弁可能だが、Aは×。

※付随して起こる可能性・予見可能な犯罪も、共犯として責任を負う

↳ex)「腕を折るだけで殺すな」と指示していても、Batteryの結果としてVが死亡したら、死についても共犯。

↳ex) Robberyの謀議で、rapeまでは予見不可能。Rapeの共犯は不成立。

↳ex)同乗中に、武器を示しながらstoreに寄ってくれと言われて行った場合、robberyの共犯が成立する。

↳更に死亡結果が発生したら、felony murderの共犯である。

Withdrawの判断基準

（1）単にencourageしただけなら、discourageすれば共犯の責任を逃れる。（withdraw）

↳途中で離脱して「帰宅する」旨を述べただけでOK。

↳無連絡で現場に参上しなかっただけでは、withdraw×。

（2）aidしてしまうと、withdrawのために、①中和 or ②阻止の努力が必要になる!!

↳未着手の段階では、withdrawの告知で足りるとも考えられる。（これしか選択肢がない場合）

注 Conspiracyはwithdrawできない。（直ちに既遂に達するから）

注”withdrawal”は共犯のみの概念。→「larcenyのwithdraw」という概念はない!!

・他人の住居から出てきた者を捕えた警察官が、賄賂を受領して逃してしまった場合、”accessory after the fact of burglary”のみ成立する。（警察官は、実は窃盗（Larceny）犯人であるknowledgeがない）

・盗品受領時に知らなければ、後に盗品と知って返さなくても犯罪（accessory after the fact to burglary receipt of stolen property）不成立。

・自動車窃盗犯と知って、逃走に協力して山道を一緒にドライブした場合、accessory after the fact 成立。

Aider & Abettor（幫助）

“Aider and Abettor”=purposely assists, aids, helps, encourages or otherwise causes the perpetrator of the given crime to commit the crime through the assistance of the aider and abettor. (No conspiracy is required)

“Aider & Abettor”は、specific intent crime だから、intent が無い限り（negligentがあっても）不成立。

↳正犯が殺人目的で毒物を欲求したとき、1%の確率でアレルギー反応が起きる薬物を代わりに渡したところ、被害者がアレルギーで死亡しても、無罪。

Solicitation (教唆)

※正犯が着手する intent は必要だが、完了する intent は不要。

※ask すれば OK。(同意は不要)

※正犯が同意した時点で、「教唆→謀議 (Conspiracy)」になる。(merge される)

※正犯が犯罪を行ったら、「教唆→共同正犯 (Accomplice)」になる。(merge される)

・A に犯罪を依頼するメッセージを残しておいたところ、B が聞いて実行した場合、

↳B に対する教唆×。A に対する教唆○。(注 State によっては、A の認識を要する)

・行為を encourage すれば足りる。(intent を communicate する必要はない。)

Conspiracy (謀議)

☆全ての犯罪において (strict liability crime 含む)、“conspiracy” は specific intent crime だから、intent なしが defense になる。(“Attempt” と同じ)

・illicit (illegal) still (違法な酒製造) を operate すると、Battery の conspiracy あり。

・intended crime が実行されなくても、“conspiracy” は成立する。

※Conspiracy は①agreement+②overt act で直ちに既遂だから、“withdrawl” の抗弁×。

↳同様に、「larceny からの withdrawl」もありえない。

・盗んできたら購入するという合意は、“conspiracy” にならない。[the crime of receiving stolen property knowing it to be stolen が成立する]

※A→B→C と計画が伝えられると、AC 間は conspiracy 不成立。

注 conspiracy のときは、他人の結果にも注意する。

↳1 人以外の全員が犯意がない場合 (冗談、おとり捜査 etc.)、conspiracy 不成立。

↳この場合、“intent” が無い。“agreement” (at least two “guilty mind” s) がないという説明も可。

↳1 人以外の全員が conspiracy について無罪宣告を受けた場合も同様。

↳相手が当該法律で守られる者で、conspiracy が成立しない場合、結局、違反者についても不成立。

↳これは、相手方を法律が罰していないことが理由。被害者だからではない!! (社会的法益)

↳注但し、“unilateral approach to conspiracy” を採用している場合は、成立する。

・「Office が外国人の state ID を支給するときに金銭を受領しはならない」という法律は、外国人が保護対象
↳common law では、両者とも、conspiracy 不成立。

※共謀者が legally insane であることも、Conspiracy を免れる抗弁として有効。

※共謀者の 1 人が diplomat であり、immunity を認められても、他方の conspiracy は成立する。

※予見可能であれば、謀議者が他の犯罪を行った分まで罪に問われる。

↳ex) 強盗の際に、共犯者が誤って V を死亡させてしまうと、一緒に felony murder になる。(予見可能)

☆Conspiracy では、「不能犯」の抗弁×

Attempt (未遂)

☆不能犯も、未遂 (Attempt) になる。〈同様に、不能犯は conspiracy になる〉

↳ex) マリファナと信じてタバコを吸うと、attempt to smoke marijuana cigarette になる。

↳ex) ピストルで撃ったが、相手は防弾チョッキを着ていた場合、attempt murder になる。

↳ex) A が B に殺人を依頼して、B が撃ったが、B は既に死亡していた場合、A は attempt murder である。

☆Attempt の犯罪では、“impossibility より “(specific) intent なし” の方が強い!!

☆Attempt は、Conspiracy より重い罪である!!

ex) 目を瞑ってリングを shoot しようとして、生徒に当って死亡した場合、murder 成立。(reckless)

↳but 生徒に当らなかった場合は、attempt murder にならない。

※gunpowder を 20pound 以上購入すると犯罪である場合に、1pound でも犯罪と思いながら 10pound 購入した場合、犯罪不成立。(構成要件を非充足であり、不能犯でない)

※Statutory Rape の未遂は、「16 歳未満の者と性交渉する intent」が必要。(単なる行為の認識では不足)

< Defense >

☆state は affirmative defense (ex) 正当防衛、insanity 等) は、憲法上の権利ではないから、立証責任を被告人に負担させても、Due Process に違反せず合憲。廃止しても OK。

↳Cf. Rape は、“without the Victim’s consent” が構成要件だから、州法で“consent”があったことを被告人の立証責任とすることは×。

MBE criminal では、“consent” (同意) の抗弁は、殆ど正答にならない。

※刑事において、J は検察官に direct verdict を与えることは×。他方、jury が絶対に検察官の主張を支持しないと考える場合に、被告人に direct verdict を与えることは OK。

・ involuntary intoxication の結果、幻覚を見て殺人が自分の悪い評価を風潮していると信じた場合でも M' Naghten Test によっても、殺人は正当化されない。（殺人行為が悪いことと判っている）

・ 過剰防衛 (imperfect self- defense doctrine) を採用する state では “voluntary manslaughter” になる。

・ 攻撃者がナイフを落とした後は、正当防衛は終了するが、未だ Provocate された状態であるから、voluntary manslaughter になる可能性が高い。

・ 「攻撃者の言葉が、防衛者を怒らせる intent であった」としても、正当防衛は認められない。

↳ 尤も、voluntary manslaughter になり、murder を免れる可能性はある。

・ 挑発して相手が攻撃してくる契機を創り出した者であっても、（名前を繰り返し呼んだだけなど、）通常は怒らせるに至らない程度であれば、正当防衛の主張 OK。

※ armed robbery の犯人は、店主から撃たれたとしても、正当防衛として反撃 ×。

※ 誤想防衛では、mistake が合理的か否かで決まる。

・ 財産を守るために Deadly Force を使用できるのは、「D が家の中に居て、Burglary に対抗する場合」のみ!!

☆ Necessity (緊急避難) は、Homicide (殺人) には ×。

↳ ex) 既にパラシュートが壊れており、紐を切らなくても死ぬ運命の人の紐を切っても、“殺人” でないから、緊急避難 OK。

※ 不法逮捕を免れるために、Non-deadly force のみ使用 OK。

☆ 隠れている felon を撃つことは ×。（逃亡防止にならない）

・ fault により緊急場面を引き起こした者は、necessity 主張 ×。

・ 人命を救うために 必要であれば、deadly force を使って脅迫し、必要な道具を得ることも OK。

※ Duress や involuntary intoxication は、robbery を否定する事情であり、その結果 felony murder も免れる。

“The Necessity Defense” と “Duress” は、homicide には抗弁 ×。

※ entrapment は積極抗弁だから、D に立証責任を負わせても OK。

☆ entrapment の抗弁に対しては、P は過去の同種前科を証拠として提出し、D の predisposition to commit the crime を立証して OK。

・ 自動車窃盗を繰り返している者に対し、「ベンツを運んできてくれ」と言っても、entrapment の抗弁 ×。

☆ “knowingly” の犯罪類型では、“intent” は不要。（当該構成要件の認識が必要）

↳ 犯罪不成立の理由としては、「(○) not know～」 「(×) not intend～」

↳ ex) リサイクル可能な物を knowingly に捨てると犯罪という規定の場合「新聞紙がリサイクル可能であること」を知らなかった場合は 不成立。

↳ex) 執行猶予になった刑が無かったことになると思っており、「前科もない」と証言した場合、knowingly は認められない。(法律の mistake も犯罪不成立になる)

↳ex) ” knowingly cause more than \$500 in damage to another’ s property” という法律で、相手の物が壊れるとは思わなかった場合は、犯罪不成立。(“should have known” では不足)

☆Mistake of Law の抗弁は、statute が” knowingly” 定めている場合のみ OK。

↳尤も、違法薬物と認識した後は、所持が合法と信じていても、「willfully possess」にあたり、有罪である。(etc. 「知らない方がいい」と言われて、聞かなかった場合)

☆Mistake of Facts の抗弁の成否は、“reasonable” か否かで決まる。

↳reasonable mistake → strict liability crime 以外は、全ての crime に抗弁 OK。

↳unreasonable mistake → specific intent crime のみ、抗弁 OK。

↳ex) 他人の家の中に置いてあった黒色の laptop を見て、盗まれた自分の物と考えて、侵入+窃盗した場合、unreasonable であるが、larceny 及び Burglary は何れも specific intent crime だから不成立。

ex) Police Office の殺人は加重罪の場合、私服だったため知らなかったことは reasonable な Mistake of facts であり、通常の殺人になりうる。

<その他>

☆strict liability は、“public health and safety” に関係する場合に科されうる。(軽い刑が通常)

↳ (×) felony to fail to register a firearm

↳ (○) misdemeanor to make the sale of adulterated milk

・未成年に酒を提供することを禁止することは、州法で strict liability と定められている場合がある。strict liability でない場合は、reckless で足り、intent を要しない。

※16歳未満の子供を雇うことを禁止する法律 (strict liability) に違反した場合、会社のみならず、採用責任者も liable である。

・HIV 陽性の血液を売ることの禁止は、strict liability とできる。

☆strict liability に対する抗弁は、①insanity、②involuntary intoxication、③法律自体が憲法違反、④ (maybe) duress。→cf. 同意は抗弁にならない。相手の年齢を知らなかったという弁解は×。

☆Strict Liability の合憲性について「規制が due process の対象外」という肢は誤り。→D が採用責任者であることが正解。

・police が逃走中の felon に対して deadly force を使用してよいのは、“probable cause to believe that the suspect poses a significant threat of death or serious physical injury to the officer or others” の場合のみ。(単に“felon” というだけでは、deadly force の使用は×)

・ ”recklessly damaging property” は、酩酊して重機を動かして発生により成立する。重機を動かしただけでは成立しない。

用語 bigamy[重婚罪]

・ “corrupt motive” は、犯罪の要件でない。無関係。

引っかけ statute murder が問題の場合、common law murder の要件に関係なし。

☆検察官は”beyond a reasonable doubt” の証明が必要。（“clear and convincing” ではない!!）

・ “contributory negligence（寄与過失）” は、刑事には適用なし。

※P が expert witness を出し、D が lay witness しか出さなかったとしても、当然に Insanity が否定される訳ではない。

©HT 20110513